
水の螺旋

Tomokazu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

水の螺旋

【Nコード】

N8500Y

【作者名】

Tomokazu

【あらすじ】

国立K大学の大学院に所属する学生、鳥栖 凜。

彼は石山 満男教授から、研究テーマの変更を勧められる。

そのテーマは、これまで世界中のどの研究者も扱い得なかった、この現実とは別の世界『精神世界』にまつわる研究だった。

避けられない宿命を自身のDNAに書き込まれていた凜は、同じ宿命を背負わされた少女、日下 愛希とともに、真実の追求を目指す。

果たして、彼らの前に待ち受ける、驚愕の真実とは…！？

第一章・Repetitive (part・1)

(第一章・Repetitive)

1

また、この夢か。彼は思った。

自分は今、水の中にいる。けれど、自分の身体自体は水に包まれてはいない。第一、肌に水の感触も、水中にいれば感じるであろう浮力も感じない。むしろ、四方を水の壁に包まれた空間の中、水でできた地上の上を重力に従うがままに立っている、と表現したほうがいいかも知れない。

目の前に、水の階段があつた。ひと巻きのらせんを描きながら、それは下の階へと続いている。一步一步、確かめるように下りてみる。ピシヤリ、ピシヤリという水の跳ねる音を聞きながら下の階に下りる。突然、眼前に宇宙とも云うべき、何か果てしのないものが広がった。次第に胸の中の時間が加速度を増し、気づけば自分は今、光の速度で気の遠くなるような時間の中を旅している。それは、我々のたどってきた進化の歴史だ。過去と現在と未来を途絶えることなく繋いでいる、らせんの形をしたものの果てのない旅路だ。

彼は急に怖くなった。かたく目をつぶったが、身体に感じているそのスピードはなくならない。おそろおそろ目を開けてみた。自分の周りをぐるぐる回っているらせんの一部が、激しい光を放っていた。その光のエネルギーは、自分の目から自身の身体全体の細胞へ伝わり、身体全体を激しく揺さぶった。まるで、自分の目の前のらせんと、自分の身体の中のらせんが呼応しているかのように思えた。

彼は大きく息を吐き、再び目を閉じた。今の周囲の情景は、測り知れない空洞のような得体の知れない怖さがあり、スリリングであり、壮大であり、心地よくもあった。生命の源である宇宙と、自分が一体になっているような、そんな快感があった。

と、怖いと思うくらいに肌で感じていたスピードが急に消えた。

彼女は暗闇の中に落ち込んでいた。目の前には、大きな壁が立ちはだかっている。暗闇なのにも関わらず、目の前の漆黒の壁だけははつきりと見える。その壁には、何やら文字が書き込まれている。A、T、G、Cという四つのアルファベットが延々とランダムに続いている。こんな文字の羅列を彼は大学の教科書で見た記憶がある。自分の中にも生来刷り込まれている、生命を司る暗号、生命が生命たりうる証。壁にはその証となる情報が刻まれていた。

むろん、その暗号の並びをすべて覚えてはいるわけではない。しかし、なぜか彼には、これがヒトゲノムの配列だと思えた。さらに、その配列にとどころミスがあることまで分かった。つまり、突然変異によって、情報が書きかえられてしまっているのだ。彼は、何とかこの壁を壊したいと思った。そうしなくては、私たちには未来はない、という直感があった。しかし、目の前にはびこる巨大な壁に比べ、自分の存在はちっぽけなものであり、こんな巨大な壁など崩せそうにはなかった。敵わないと悟った彼は、絶望と恐怖に襲われ、その場にへたり込んでしまった。

果てのない暗闇の中で、壁はちっぽけな男をあざ笑うかのようにそびえ立っていた。

けたたましい目覚ましの音で、彼は目を覚ました。

窓の外は明るい。いつもの朝の光景だ。彼はほっと胸を撫で下ろした。この夢を見るのは、はじめてのことではなかった。もう何度も見ている。なのに、夢の中のあの闇の恐怖から、明るい朝日の住む朝に帰ってこれた時に、胸を撫で下ろす癖は未だに治らない。

彼は起き上った。布団をたたむこともなく、むしろ踏みつけるよ

うにして歩き出し、冷蔵庫のドアを開けた。中に、昨日買ってきた缶コーヒーが入っている。彼は缶コーヒーのプルタブを開け、一気に飲み干した。生きた心地が取り戻せた気がする。

彼の名は、鳥栖とりす 凜りんという。国立K大学の大学院に在籍する学生である。もともと大学の学部時代からK大の理学部生命科学科に在籍していた彼は、特に大きな目的もなく、友人たちの多くがそうするように、同大学の大学院・理学研究科生命科学専攻に進学した。しかし、ある研究テーマにそって実験をし、成果を出すのが望ましいとされる大学院の研究室において、彼は特に研究が好きというわけでもなく、その上、与えられた研究テーマも、なかなか成果の出せないものであった。そんなどうしようもない研究室生活を大学4年の卒業研究から2年間も続け、気がつけば修士課程の2年生になっていた。修士課程の2年といえば、そろそろ自分の研究成果をまとめて修士論文を作成し、修士号を取得しなくてはならない学年であり、また、就職するかさらに博士課程へ進学するか、という節目でもある。しかし、彼は思うところがあって就職活動も始めていなかったし、かといって博士課程に進学する意思もとくになかった。何とも八方ふさがりな感じがして、彼は途方に暮れていたのだ。その上、眠ればあんな不思議な夢を頻繁に見てしまう。やるせない気持ちになってしまう。

しばらくボートとしていたかったが、そういうワケにもいかない。今日も朝から研究室へは行かなくてはならない。彼は適当に朝食を済ませて、身支度をととのえて、下宿先のアパートを出た。穏やかな春の風が、身体を通り抜けるが、彼の心はどうにもじめじめした梅雨のようだ。

彼は自室のある2階から下に降り、アパートを出た。どうしても行きたくないという気持ちに後る髪を引かれ、少し遅刻気味の出発だった。

第一章・Repetitive (part・2)

2

結局、凜は本来研究室に着くべき時間より、20分遅れて到着した。研究室の戸を開け、朝の挨拶を誰にもすることなく、自分の実験机へと向かう。すると、「おい、鳥栖」と呼び止められた。助教の上島孝平だった。

「お前、また遅刻」

たしなめるように云う上島に対して、凜は「すみません」と悪びれないふうで答えた。

「こんなに毎日毎日遅刻してくんの、お前だけだぞ。いったいぜんたい、やる気あんのか？」

「ああ、はあ…」

煮え切らない態度の凜を、上島は訝るような目つきで見る。

「実験も最近は全然進んでないみたいだしさ。一体何しにここに来てんだよ。まさか、このままうだうだやってても修士号取れるとか、思ってたんじゃないだろうな。修士だったって、そんな甘いモンじゃないぞ」

「…すみません」

「明日から、もうちょっと早く来いよ。つたく…」

凜は舌打ちしたいのを抑え、上島に少し頭を下げて、自分の実験机へと歩いて行った。

実際のところ、この数ヶ月間実験は進んでいなかった。実験しても失敗続きで、なかなかデータが取れないし、別の実験の案も思い浮かばない。自分の不器用さや実験センスのなさがその一因であるというのは、認めざるを得ない事実だと思う。しかし、もうひとつ

大きな要因があると、凜は思っていた。つまり、自分は研究テーマに恵まれなかったのだ、と。

とにかく、もともと実験が得意でない人間が、数ヶ月も実験がうまくいかないという困難に直面し、より一層士気が失われてしまったのだ。これが、ある程度でも実験データが出ていれば、もう少しやる気も出るというものであろう。

などと考えながら歩いていたら、ふと自分の実験机に小さな紙切れが置かれているのに気がついた。どうやら、研究室のボスである教授からの伝達事項である。

『重要な用件あり 到着次第、教授室へ来るように』

重要な用件、何だろうな。と凜は思いながら、机に鞆を置き、教授室へと向かった。

凜は教授室の扉をノックしてから開けた。

「失礼します」と云って中に入る。デスクの上に置かれたパソコンのディスプレイを眺めて背を向けていた男が、くるりと椅子ごと回転して、こちらを向いた。やや薄くなった白髪交じりの頭髪。見透かすような細く切れ長の目。あざけるかのような微笑みを蓄えた唇。やや面長の顔がそれらを支えている。この男こそが、凜の所属する研究室のボス、石山 満男教授であった。

「やあ、鳥栖くん。遅かったじゃないの」

黙ったままの凜に、石山はさらに言葉を続けた。

「また遅刻？ 相変わらずだね。上島くんに怒られなかったかい。彼、君によくない意味で目をつけているからね」

この悠長な喋り方が、凜には鼻につくのだ。凜はうんざりしたような表情を浮かべるのを我慢して、平然とした顔を取り繕いながら云った。

「僕に何かご用ですか」

「ああ、うん。まあね。それより、最近実験はうまくいってるのかな」

石山は話をはぐらかしてきた。

凜は素直に、「いいえ、最近は全然うまくいってないです」と返した。

「だろうねえ。君の最近の様子を見ていたら。それに、どうにも君は実験操作に関しても不器用そうだ」

この男は、ただあざけるためだけに、わざわざ人を呼び出したのだろうか。凜は少しムツとして、「用件はそれだけですか。それじゃあ」と、教授室を去ろうとした。

「まあ、まあ、待ちたまえ。そんなに話を急ぐものじゃない。君を呼び出したのは、ある重要な提案があつたからなんだ」

石山は、去ろうとする凜を呼び止めて、こう云った。

「提案ですか？」

「そうだ。実は君には、今日から研究テーマを変えてもらいたいのだ」

「テーマを変える！？」

石山の突然の申し出に、凜は驚いた声をあげた。当然である。修士課程の2年といえば、本来これまで行ってきた研究をより掘り下げ、修士論文を作成できるレベルまで解析を進めるべき学年なのだ。しかし、そんな地点に入ったであろう凜に対して、石山は研究テーマの変更を勧めてきた。

石山は笑って云う。

「今の君を見ていたら、このままでは埒が明かないと思うんだよ。まあ、それは君だけに問題があるわけじゃない。君自身の能力や精神面を除いても、君の今当てられているテーマは、世界中の研究室で別のモデル生物を使ってすでに説明が進んでいるから、なかなか新たな発見ができないものだしね。そこで、だ。君にはまったく別のテーマについてもらおうというわけだ。これから君にしてみらおうという研究内容は、おそらく世界中の誰もがやっていない。しかもだ……」

「……しかも？」

凜は自発的に訊き返した。

石山は身を乗り出して言葉を続ける。

「やれば100%、結果が出る」

「100%……？」

にわかには信じられない話だ。まだ学生という立場であり、なおかつそれほど研究意欲のない彼でも、5年以上も科学の勉強をしていれば、研究は生半可な努力ではなかなか結果が出ないものだということぐらい知っている。しかし、石山は100%の成果を保証してきた。これはどうにも奇妙だ。

「もちろん、無理にとは云わない。君が従来のテーマを継続して、修士論文を作成するというのなら、それでもいい。けれどね、君は今のテーマにそれほど情熱はないみたいだし、確かに今の成果の上がり方から考えても、情熱を持てと云う方が無理というものだろう。それならいっそ、より成果の上がりやすいテーマに変更するというのも、いい手なんじゃないかと思うんだが。どうかね」

確かにそうかも知れない、と凜は思った。今のウダツの上がらない自分の状態は、この成果の上がりっこない研究テーマのせいかも知れない。研究室の同級生たちは、程度の差はあれど、自分よりも扱いやすいテーマを与えられて、それなりの成果を上げているのだ。そのことに対する劣等感が、今の情けない自分を作る要因になっているのだ。元々、生命科学という学問が嫌いではなかった。学部の頃は、それなりに頑張って勉強してきたし、それなりに楽しんでやっていたつもりだ。それが、研究室で研究をすることになってから、一気にやる気が失せてしまった。

…すべてはテーマのせいなんだ。

凜はそう自分に云い聞かせた。そして、石山の申し出に応じるのも悪くないかも知れないと思い始めた。

「それで、どんなテーマに変更するんですか」

凜は訊いた。しかし、それに対する石山の返答は、どうにも意外なものだった。

「悪いが、それは今ここでは云えないんだよ」

「はい!？」

凜の素っ頓狂な声を可笑しがるように、石山は笑った。

凜は可笑しいどころか、イライラが募るばかりだ。ハナツから腹立たしい石山の人を食ったような態度や喋り方にも我慢して、石山の話聞き、提案に乗ろうとしたら、今度は真っ向から転がされるような言葉を返され、嘲笑される。まるで、大きなボールの中に閉じ込められて、辺りをゴロゴロと転がされているような気分だ。

「まあ、そんなに焦らないでくれたまえ。もちろん、ゆくゆくは教えるつもりだよ。けれど、このテーマは世界中の研究者たちが、あまり介入しなかったものだからね。ちよつと様子を見たいんだ。君がこのテーマの研究を引き受けてくれるなら、一定の成果が出てから、君に具体的なことを伝えようと思つてね」

石山の云うことが、凜にはどうにも理解できなかった。しかし、まあ成果が出るなら乗つてみてでもいいのではないか、とも思った。別にこのテーマの研究を一生続けるわけではない。飽くまで修士を出るためのアイテムとして使えばいい。そのテーマを継続するのが嫌だったなら、それ以降はやめればいいのだ。まあ、それは修士卒業後も研究を続けるならの話だが。もっとも、就職活動もしていない凜にとって、このまま博士課程に進学する可能性は十分に高い。…分かりました。やってみますよ」

凜はそう答えた。

石山は相変わらず不敵な笑みを浮かべながら云つ。

「そうか。引き受けてくれるか。じゃあ、さつそく君に課題を与えよう」

石山は自分のデスクにあるパソコンから、ひとつのテキストファイルを開き、それをプリントアウトした。そのプリントを手に取り、凜に手渡す。

凜はそのプリントを眺めた。そこにはA、T、G、Cという四つのアルファベットが不規則に羅列されたものが、1000ほ

ど続いていた。どうやらDNAの塩基配列のようだ。

「塩基配列のようですが、何の配列ですか」

凜は訊いた。

「悪いが、それも今は教えられないんだよ」

石山はそう云って、ひと呼吸おいてから続けた。

「さて、この配列にはとある規則性がある。その規則性を見つけてきてくれ、というのが課題だ」

凜は手渡されたプリントを眺めながら、この課題に何の意味があるのだろう、と思った。どうやら、課題をやってみないことには、それは分からないようだ。

(参考) プリントの配列

. . . GCCCTAGCAGTGCATAGTGATATCCTT
TGACATACGGACTATACGATCCCCCTTT
GCAGTGCATAGTGATCAGTGCCCTACCC
TTTCCCACTATTGCAGTGCATAGTGATCA
GTGCCCATACCACTGTTTCAATAATTGGCT
GTGCACCTGCATAGGAGTCAAGTGCCCTACA
CTTTACACCCCTTTTGCAGTGGAAGAATGA
CAGTGCCCTAACGTCTGATACAGGATAATGA
CGCAGTGCATAGTGATCAGTGCCCTTTGTT
GACAAAGTGTCCAGTGCAGTGCAATAGTGATC
AGTGACCTAGTACCACTCCCAATTTTGCA
AACCCGTGCAGTGCAATAGTGAGTGCC
TAATGGGTTTGTGCGAATGCAAGTGCAAG
TGATCAGTGCCCTAAACAAATGCGCA
TCATTTTACAGTGCAGTGCAATAGTGATCA
GTGCCCTAAATAAGCCCAATTAAGATCGAT
GCAGTGCATAGTGATCAGTGCCCTAGCCCA
TTTCTGATGCAGTCCATAGTGATCAGTG
CCTAAATCTCGTATGGCAATAGTGAT
CAGTGCCCTAATACTCAATGGAATTT
TAGACATAGATTGATGACCGCATGCTA
GTGATCAGTGCCCTAGCGCATATATGCG
CATATGCAGTGCAATAGTGATGCGCTA
ATTTTGCCCAATGCCCAAGTCCCAAGT
TTTTTTAGAAACCAAGTATGCAAT
GTGATCAGTGCCCTAAATTTCCGCAAGTGCA
TAGAGATCAGTGCCCTAAATTTGGCCCAATGCG

C A C T G C A T A G T G A T C A G T G C C C T A A T T A
A C C C C G G G A T T A T G A C G G T A T G C G C A
G T G C A T A G T G A T C T G T G C C T A T C C A T T
G G C C A T G C C C A T T C C A T T A G T T A C G A T G
C A G T G C A T A G T G A T C A G T G G G T A A T C C A T
T T A T G G G C T G C A C T G C A T . . .

教授室を出ると、研究室はもう本格的に稼働していた。

研究室の学生たちは、論文を読んでいたり、パソコンでデータ整理をしていたり、ピペットを手に実験作業をしていたりしている。

凜はそんな彼らを横目を通り過ぎ、自分のデスクに着くと、石山から手渡されたプリントを鞆の中に無造作に放り込み、そのまま鞆をひったくるように担いで、研究室を後にした。課題を学内の総合図書館で済ませようと思ったのだ。別段、凜にとって図書館が集中しやすい場所というわけではなかったが、煩わしい研究室の中で行うよりは、気分的にもいささか楽だ。

理学研究科研究棟を出て、図書館に向かう道中、前から知っている顔がこちらに向かって歩いてくるのが見えた。ショートカットに眼鏡をかけた、利発そうな顔立ちの女の子。向こうもこちらに気づいたらしく、少し笑って会釈をした。凜もその子に対して、会釈を返す。が、向こうの潔い態度とは逆に、凜の会釈は何だかぎこちなく、頭を下げたのか下げてないのかといった程度のもだった。本来、凜は対人コミュニケーションが苦手である。突然、思いもよらない相手に出くわすと、なおさら不自然な態度になってしまう。

間宮 遙、彼女は本学の二年生でありながら、石山研究室に出入りする学生である。入学当初から、相当優秀な生徒として評価が高く、そのこともあって、この4月から研究室の実験補助のアルバイトをすることになった女の子である。

お互いが話すのに苦労しない距離まで歩み寄った時、遙が「おはようございます」と云った。凜も半ば条件反射的に「ああ、おはよ

う」と返す。

「どちらにいかれるんですか？」

「図書館だよ」

「へえ」。私はこれから研究室へ向かいます」

「えらく早いんだな。授業は？」

「今日は授業が午後からなので。じゃあ」

凜はしばし立ち止まって、歩いてゆく遙の後ろ姿を眺めた。午前中に授業もないのにわざわざ研究室に来るなんて、熱心な子だな、と凜は思った。しかも、相当優秀であるにも拘わらず、そのことを鼻にかけるでもなく、気さくで親しみやすい雰囲気も醸し出しているのだ。まったく、人に出くわしたらすぐ挙動不審になってしまう自分とは大違いである。おまけに、研究室内での外見に関する評判も高いときてる。

「まったく、才色兼備かよ」

凜は小さく嫌味を云うと、再び図書館に向かって歩き出した。

凜は図書館に着くと、なるべく学生の少ないスペースの壁際の席に座り、鞆から例のプリントを出した。無造作に放り込んだせいで、少し皺が寄っている。凜はそんなことはお構いなしで、それを机の上に置き、そこに書かれたDNA塩基配列を眺めてみた。一番目の塩基から、GCCCTAGCAGTGCA TAGTGAT... という風に続き、全部の塩基は1000もある。

ここから規則性を捜さなくてはいけないのだが、どこから着目すればいいのだろうか。

DNAの塩基配列というのは、すべてが理由もなくランダムに並んでいるというわけではもちろんなく、意味のある特有の配列も多く存在している。例えば遺伝子と呼ばれる領域は、我々の身体を構成するタンパク質の設計図であるし、その他にもさまざまな生理的活動のために必要な特殊配列や、領域特異的な配列というのはたくさん知られている。中には、短い配列が数百、数千も続いているも

のもある。

凜はこの中にその配列が隠されているのだろうか、と考えてみた。そしてその瞬間、気の遠くなるような心地がした。これまでに実に多くの特異的配列が確認されており、どれに目をつければいいのかさえ分からないからだ。仮に、ひとりでその作業をするとなると、少なくとも数ヶ月という時間を要するであろう。

しかし、今の段階では、もちろんその可能性も捨てきれない。凜は、特に深い考えもなく図書館まで出てきたことを後悔した。研究室なら、パソコンや専門書がすぐに手に届く場所にあり、すぐに調べられる。図書館にもパソコンや本はないわけではないが、なにぶん広いので、探しに行くだけでも骨が折れることだろう。

面倒に思いながらも、凜はエレベーターまで歩き、そこから理系専門書が置いてあるフロアまで上がっていった。フロアで手ごろな分子細胞生物学系の本を一冊手に取り、もといいたフロアへと戻る。

いざ本を開いてみたが、なにぶん分厚い本である。どこを見ればいいのか分からない。ましてやどの現象に関わるものなのか、目星をつけないことには、探しようもない。彼は一瞬にしてやる気を失った。それでも、諦めては終わりだと、ウダウダと本を眺めてみたが、当然目ばしいものには行き当たらない。彼は結局本を閉じた。

ふと見れば、12時を回っていた。まだ図書館に来て1時間程度しか経っていないかったが、丁度やる気を失くしたところである。凜は休憩がてら、食堂へ昼食をとりに行くことにした。

昼食を済ませ、凜は図書館に戻ってきた。

席につき、机の上に置きっぱなしにしてあった例のプリントを手にとって眺める。専門書は参考にはできないことは、午前中の段階で分かつている。今は、配列をよくよく眺めることで、何か手掛かりを見つけようと試みる以外にないようだ。

じつくりと配列に目を通す。そのうちに、ひとつ気になるところが見つかった。

1番目の塩基から数十塩基離れたところに、“CCCTA”という配列がある。右側に視線をずらしていくと、さらに数十塩基先には、“CCATA”という配列が見つかった。さらにまた数十塩基先には、また“CCCTA”……。このように、同じような配列がこのプリントに書かれた配列の全体にわたって散在していた。凜はさらにその配列の前の塩基配列にも注目してみた。すると、これもまた同様に、おおよそ全体にわたって散在している。

このような視点でよくよく眺めてみて、凜はこの配列の大きな特徴に気がついた。

“G C A G T G C A T A G T G A T C A G T G C C C T A”。この25の塩基で構成された配列、もしくは数塩基の違いはあるがこれとよく似た配列が、このプリントに書かれたDNA配列全体に散在していた。というよりは、むしろこの配列以外の塩基構成の配列の方が少ないという印象を受ける。つまり、このプリントに書かれている塩基配列は、ほぼリピート（反復）配列だと云えるということだ。

リピート配列とは、特定の領域において同じような塩基構成で繰り返される配列のことである。例えば、染色体のセントロメア（中心部を構成する領域）やテロメア（末端を構成する領域）は、それぞれ特有のリPEAT配列が、数百・数千も繰り返されており、これが領域特異的な機能に大きな役割をもっていると考えられている。つまり、この配列も何かの機能を担っていると考えても不自然ではない。

他に何か特徴はないだろうか。凜はプリント中に繰り返し登場するこの類似配列をより注意深く眺めてみた。すると、また興味深い特徴に気がついた。

これらの配列のほとんどに“AGTG”という配列が見つかったのだ。この配列が複数個確認できる方が多く、最大では3つ確認できる。しかし、それだけではこの“AGTG”という並びが、この類似配列に規則性をもつて存在するものとは言い難い。なぜなら、4つの塩基のみで構成される配列に特異性を見出すことはほぼ不可能であり、染色体DNA上にもこの配列がたくさん存在するであろうことは、考える間でもなく、当然のことだからである。

そこで凜は別の4塩基で構成される配列を適当に身繕って、それがこのプリントの配列中に散在する25の類似配列の中にどれだけ存在するかを調べてみた。まず、類似配列の先頭から4つ分塩基を抜きだし、“GCAG”という配列を考えてみる。しかし、この配列はプリントの配列中にそれほど多く存在するわけではなく、類似配列内にも、確認できるものと、いずれかの塩基が変わってしまったていて確認できないものがあつた。次に、2塩基目から数えた“CAGT”という並びの場合。これは、凜が注目した“GCAGTG CATAGTGATCAGTGCCCTA”という塩基配列で考えれば、2つ確認できる。しかし、プリント内全体で見ると、どこかの塩基が別の塩基に置き換わっているものが多く、それほど高頻度で見られるわけではなかった。他にも同様な方法でいくつか調べてみたが、やはり他の配列と比較しても、“AGTG”という並びは

特に多いようだ。

以上のことから、ふたつのことが分かった。ひとつはこのプリントの配列は、“G C A G T G C A T A G T G A T C A G T G C C T A”という配列、またはそれと類似した配列が繰り返されているということ。もうひとつは、この配列の中に“A G T G”という塩基配列が、群を抜いて多いということ。

石山の云う規則性とは、おそらくこのことだろう。

凜は課題を達成できた満足感に浸りながら、意気揚々と研究室に戻っていった。

第一章・Repetitive (part・5)

5

「ほお。よく気づいたね」

石山が珍しく、感嘆の言葉を口にした。それでも彼の顔は、目じりが垂れ下がり、唇の端が上を向き、いやらしい笑窪が唇を挟んでいる。

凜は図書館から帰ると、すぐに教授室に赴いた。そして、自身の発見した規則性を石山に話したのだった。

「しかも、ただ類似配列が繰り返し登場するというだけでなく、その中にあるA G T Gの配列にも目をつけるとは、思ってもいなかったよ」

相も変わらず嫌味な笑みを浮かべたまま、石山は云った。

「…それでこの課題には、どのような意味があるのですか？」

石山の称賛の言葉にはあまり取り合わず、凜はこう訊いた。石山が喋ることは、たとえ褒め言葉でも、嫌味にしか聞こえない。

「うーん、理由ねえ…」

石山は少し考える素振りを見せてから答えた。

「まあ、ひとつは君に頭の体操も兼ねて、テストをしたんだよ。君の着眼点や洞察力を試すという意味でも、いい機会だしね。けれど、それだけが理由じゃない。もうひとつの理由は、まだ今の時点では、君が今からどのような研究を行うのか教えることができないから、せめてこの配列を君に強く印象づけたかったということだ」

「つまり、この配列はこれからの研究に必要なものだということですか」

「もちろん。というより、この配列がこれから君が行う研究の最も

キーとなる配列だと思ってくれていい」

石山はひと呼吸おいてから、さらに続ける。

「まあ、今回の課題で、君にはそれなりにいい着眼点と、洞察力が備わっていることは分かった。じゃあ、次の課題へ行くとしようかな」

「えっ、また課題ですか」

「もちろん。まさか君、これから私が研究の詳細について教えるその時まで、のほほんと遊んでたらいいとも思っていたのかな」

「はは…、まさか」

凜は引きつった笑みを浮かべながら云った。が、実際のところ、石山の物云いに内心腹が立ったのだった。

石山は、やはり小馬鹿にしたようにニヤニヤと笑いながら云う。
「なら結構。次は君に手を動かしてもらおうからね」

6

3日後、凜はプリントアウトした実験データを持って、再び教授室へと赴いた。

「ほうほう、これはなかなか綺麗に出てるじゃないか」

石山は満足そうにそう呟いた。

3日前、石山は凜に4種類のサンプルを渡した。

「これらは4人の被験者から、とある細胞を採取し、それぞれDNAを抽出したものだ。因みにこれらは、サザンハイブリダイゼーション用のサンプリングをしてある。つまり、これから君が行ってもらう作業は、サザンハイブリダイゼーションによって、ある目的配列を検出してもらうことだ」

サザンハイブリダイゼーションとは、目的のDNA配列を検出する実験法のことであり、その検出には、プローブと呼ばれる目的の配列を鋳型にして作られたDNA断片が必要になる。凜は石山からプローブも渡されたが、そのプローブのことについては、石山は何も教えてくれなかったし、ましてやサンプルについての説明もハナツから乏しい。

（何の実験かは分からなくていいから、とりあえず作業だけしろってことかよ）

凜は不満に思った。自分が何を調べているのか分からないまま実験をするというのは、精神的に少々しんどいものだ。しかし、そんなことも云ってられないようだった。とりあえず、作業を進めないことには、次には進めない。

幸い、解析のためのサンプル調製はすでに終わっていたので、凧がするのは検出のための作業のみで済んだ。その作業に費やした日数が3日間というわけである。

凧が石山に提出したデータは、一度パソコンでスキャンし、専用の検出ソフトで処理したものであったが、その結果は次のようになる。一番左のレーンはDNAマーカー（DNA断片の分子数を測定するために流すDNAサンプル）であり、石山にもらったサンプルではなく、凧が独自で使用したものである。次の2番目のレーンから5番目のレーンまでが、サンプルになるのだが、凧はこれらを便宜的に左からサンプルA、B、C、Dと呼ぶことにした。その中のサンプルA、C、Dには目立ったバンドが検出できず、薄くて細いバンドが比較的分子数の小さい位置にまばらに存在するだけであった。一方で、サンプルBには比較的濃いバンドがおよそ10 Kbの位置に確認できた。つまり、この中で少なくとも顕著に目的配列の存在が確認できたのは、サンプルBのみということだ。「他のサンプルには、このようなバンドは一切見えなかったのかな」石山の質問に凧は答える。

「ええ。露光時間を変えたりもしてみましたが、それらしきバンドは検出できませんでした。もっとも、下の方に見えている細かいバンドの中に、目的の配列がないことは否定できないかも知れませんが」

「いや、これだけごちゃごちゃ出てるってことはノンスペ（non-specific：非特異的という意味）だろう。確認できなかったととらえた方がいいねえ」

石山は珍しく、屈託のない満足そうな笑みを浮かべていた。石山は普段は人を食ったような態度が板についているが、こと実験のことになると、途端に少年のように純粋な印象に変わるのだ。研究というものが、本当に好きなのかも知れない。

「そろそろ教えてもらえませんか。今からやろうとしている研究が、

「一体どういうものなのか」

「いいでしょう、そんなに引き伸ばすのも、無意味だしね。ちょっと待ってなさい」

石山はそう云って立ち上がり、彼の目の前にある引き出しを開け、一部の論文を取り出した。そして、それを凧の目の前に置く。凧は見るともなく、その論文のタイトルを眺めた。

『SDR-region is the key that makes the person dive to the spiritual World』

そこにはこう書かれていた。

和訳すると、このようになるだろうか。

『SDR領域は人を精神の世界へダイブさせる鍵である』

著者の欄には、アメリカやヨーロッパ、中国、韓国など、さまざまな国の人間の名前が連なり、最後に Mitsuo Ishiyama という表記がある。つまりこれは、石山が参加した研究についての論文である。それどころか、石山の名前が最後にあることから、おそらくは石山がこの中のトップだろう。

「何ですか、これ」

凧は訊いた。見出しを見る限り、当研究室の研究内容と関わるような論文なのかさえ、予想がつかない。そもそも、見出しにある“SDR領域”というものが何なのか、凧は知らないのだ。

「これから君が行う研究に非常に参考になる論文だ。いや、むしろここに書かれていることが、君に与えるテーマそのものと云ってもいいかな」

「…これがですか？」

「ああ。だから、読んできたまえ。君がこれを読んでから、改めて研究の詳細について、話すでしょう」

見れば、石山はすでに、人を見下すような顔つきを取り戻していた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8500y/>

水の螺旋

2011年11月30日10時49分発行